

香取遺産

vol.
217

玉姫明神記碑 栗源地域の養蚕の歴史

かつて生糸は日本の主要な輸

出品で、千葉県内でも明治20年代から大正期にかけて、生糸生産のための養蚕が盛んに行われていました。養蚕とは蚕に桑の葉を与え、蛹に育てて生糸の原料である繭をとるもので、農家の副業として広く普及しました。栗源地域でもこの時期に養蚕が広まり、岩部の台地では蚕の餌となる桑畑が広がり、また農家には指導者によって養蚕が奨励されました。岩部の安興寺はこうした養蚕に関わりがあったお寺で、境内にその歴史の一端を見ることができま

す。安興寺の山門の脇に「玉姫明神記」と刻まれた石碑が建てられています。大正7年4月建立、高さ2・5mほどの大きな石碑で、碑文は日本寺(多古町)の三三二世日淵撰文によるものです。安興寺では、大正6年4月、養蚕の守護霊神として茨城県鹿島郡軽野村(現神栖市)から蚕霊様を分祀して境内に蚕霊堂を建立し、玉姫明神と命名して祀りましたが、これを記念した石碑となります。

以後、安興寺では毎年4月

1日に「蚕霊様」と呼ばれる玉姫明神の祭礼が行われていました。境内には露天商が連なり、本堂前に芝居小屋が掛かるなど、多くの人でにぎわったそうです。時代が進むにつれ養蚕は衰退していきませんが、蚕霊様の祭礼は昭和35年ごろまで続いたようです。

他にも、境内には地域の養蚕業の発展に寄与した高木仁助翁の頌徳碑もあります。昭和30年に建てられたもので、碑文によれば、高木仁助は明治12年生ま

れ、群馬県の蚕糸学校で学び、

長野などの各県で技術者として勤めた後、県内の養蚕組合などで長く養蚕指導の第一線にあっ

たがあります。蚕霊堂の建物は今も本堂の脇に残されていますが、老朽化が進んだことから、玉姫明神のご神体は本堂に祭られています。左手に桑の葉、右手に生糸束を持った珍しい容姿の像で、元日にはご本尊などとともにご開帳されています。

岡生涯学習課 ☎(50)1224



玉姫明神記碑



玉姫明神像



蚕霊堂



高木仁助翁碑